「科学の芽」賞に寄せて

～ IMAGINE THE FUTURE.（未来を想う）～

永田恭介

幼い子はさまざまなことを「ふしぎ」に思います。彼らは，「これはなーに？」「どうして？」「なぜ？」などの質問を繰り返します。本人は記憶していなくても，両親やまわりの方々はよく理解していることです。幼い子本人も時を経て，親となり同じ経験をすることになります。やがて，小学校，中学校と学びが進んでも，同じような質問や疑問は湧いてくるはずです。しかし，徐々に疑問は持っても質問をすることは少なくなってしまうような傾向もあります。それは知識が増えることで，自分で解決できたり，あるいは逆に自分だけが勉強をしていないために知らないのではというような思いから起こってくるのではないでしょうか。さらに高校に進むと，ますます疑問の内容も高度化するはずです。しかし，答えなければならない質問はかなりが受験のためのものになっているのではないでしょうか。大学に進むと，知識はさらに体系化され，少々の問題であれば自力で解決する力を身につけることになります。そして，解かれていない問題を認識し，その問題解決に向けて挑戦することになります。大学院では，さらにその能力が磨かれます。

「科学の芽」賞は，ノーベル賞を受賞された朝永先生の「全国の児童生徒のみなさんに科学者を目指してほしい」という願いを受け継ぎ，生誕100年にあたる2006年から始まりました。

朝永先生は，

「ふしぎだと思うこと　これが科学の芽です
　よく観察してたしかめ　そして考えること　これが科学の茎です
　そうして最後になぞがとける　これが科学の花です」

と色紙に書かれ，その言葉で子どもたちに語りかけられました。何度読んでも，とても意味の深い言葉です。

1949年に，湯川秀樹先生が日本で最初にノーベル物理学賞を受賞され，日本中が沸きかえりました。続いて1965年には朝永振一郎先生が日本人として2人目のノー

ベル物理学賞受賞者となられ，大きな話題となりました。それ以降2015年までに多くの日本人がノーベル賞を受賞していきます。2015年までに物理学賞を11人（米国籍になった2人を含む）が，化学賞を7人が，生理学・医学賞を3人が受賞しました。「ふしぎ」だと思い，「科学の芽」を育ててこられた方々です。ここ2年続けて5人（米国籍になった1人を含む）の日本人がノーベル賞を受賞され，日本が随分と励まされました。

「科学の芽」賞は2006年に第1回が開催され，2015年で10回を数えました。10年間の応募作品数は，全国の小学校，中学校，高校から合わせて16,755作品となり，参加人数は19,053人（団体で応募の人数を合わせた延べ人数）にのぼりました。こんなにも多くの児童・生徒から作品を寄せていただいたことに感謝しています。

大学では，この10年間に「科学の芽」賞を受けられた方々にアンケート調査を行いました。受賞してどんな気持ちだったか，何か変わったことはあるか，将来の思いなどについてお聞きしました。第1回の「科学の芽」賞を受けられた高校生の方たちは，成人して仕事をしている方たちもいますし，今も大学院で研究を続けている人たちもいます。10年という月日の長さを改めて感じます。受賞者の多くの方々からは，実験をして結果がうまく出なくてもコツコツと継続することの大事さを学んだという報告を受けています。また，賞をもらって自信になり，その後の生活が前向きになり積極的になったという声もありました。将来の夢として，医療関係，科学捜査班，宇宙飛行士，先生，科学者などさまざまな職種が挙げられました。現在では研究や科学から遠ざかった人もいますが，生き方やものの見方は大きな影響を受けているとお伝えいただきました。

児童・生徒のみなさんが，この本から大きな刺激を受けて，さまざまなことに疑問を持ち「ふしぎ」を感じ，「なぜ」という問いに自ら答える努力をされることを大いに期待しています。

平成28年5月吉日

［筑波大学長］